ほんない歴史通信
第42号
2007.3.1

ある新聞記事から見えるもの

―「明日はわが身」を認識することの大切さ―

昨年の十月十六日付茨城新聞の記事は、いささか衝撃的であった。一面トップに、二〇〇五年度決算に基づく茨城県内四四市町村の「地方税に対する人件費比率ランキング」が掲載された。地方税収入額と人件費支出額を比較したもので、いわば自前の税収で職員の給与をどの程度まかなえるかを示すランキングである。この比率が百%を超えることは職員の給与すら自前の税収で払えない状態にあることを意味するが、それに当てはまるのが常陸大宮市、城里町、行方市、河内町、常陸太田市、大子町の六市町であった。ワーストワンが大子町であり、比率はなんと一八五・一一%。ちなみに、比率が最も小さいランキングの第一位は東海村で二五・六二%、財政力の格差はもはや言うまでもない。

財源の足りないところは国からの地方交付税で穴埋めする。同記事によると、歳入に占める地方交付税の割合は大子町の場合四一・四七%に上り、城里町の四二・二四%に次ぐ高さであった。この点でも、東海村は僅か〇・〇三%でしかない。

国の借金が右肩上がりで増え続け、昨年三月末時点では八二七兆四八〇五億円という気の遠くなるような額に達した。赤ん坊から高齢者まで含めた一人当たりの借金は約六四七万円だという。こうした財政難の時代、三位一体改革の名の下で頼みの綱であった地方交付税制度に改革のメスが入り、交付税の削減とともに来年度からは新型交付税が導入される予定である。約半数の自治体で従来に比べ交付額が減額になる、これが総務省の見通しのようである。自治体財政をめぐる環境は、一段と厳しさを増していく。

過大な負債を抱え込んで財政が破綻し、財政再建団体に移行する北海道夕張市の動向が注目されている。その再建計画には、例えば市民税や固定資産税の増税、新税の創設、各種手数料の引き上げ、小中学校の統合、コミュニティセンターの休止、あるいは職員給与のカットと人員削減等々、今後十八年間にわたる借金返済のためのさまざまな措置が盛り込まれた。住民負担の増大と住民サービスの低下という財政破綻が引き起こす過酷な現実に思いを馳せる時、果ての姿の象徴として、その問いかける意味は重く、そして大きい。

「財政危機に瀕しているのは、夕張市だけではない」として、「危ない自治体」の特集を組んだ『週間エコノミスト』(二〇〇七年二月二十七日号)のコメントの一節に得心がいった。曰く「自分の住む自治体がいくらの借金を抱え、将来の見通しはどうなのか正確に理解している人はほとんどいないだろう。それがどれだけ危険なことなのかを今回の夕張市は示している」、と。

ひるがえって冒頭で紹介したランキングからは、〝第二の夕張〟にもなりかねない多くの自治体の姿が浮かんでくる。行財政に関する徹底した情報開示、並びに住民を巻き込んだ行財政の将来像づくりが求められている。

他人事ではない、明日はわが身である。

(齋藤典生)

ふるさと歴史講座現地巡り

平成十八年度大子町生涯学習課主催の「ふるさと歴史講座現地巡り」は、徳川光圀公・斉昭公巡村コース、塩沢・栃原金山コース、鰹・塩の道コース、霊峰八溝山史跡コースの四コースを設定して実施された。

○第一回九月十六日（土）徳川光圀公・斉昭公公巡村コース

徳川光圀公は寛文元年（一六六一）三十四歳で水戸藩第二代藩主になった。光圀公は藩主時代六回、元禄四年（一六九一）西山に隠棲後は五回大子地方を訪れている。徳川斉昭公は、文政十二年（一八二九）三十歳で第九代水戸藩主になった。天保五年（一八三四）一度大子地方を訪れている（『大子町史上巻』）。

今回の現地巡りは、光圀公や斉昭公が大子地方巡村の折、立ち寄った数多いゆかりの地の中から選び実施した。

・慈雲寺（町付）：真言宗智山派の寺、光圀公から除地とし二十五石を受けていた。光圀公、斉昭公が宿泊している。

・飯村家清音楼の碑（町付）：飯村家は光圀公巡村の際の常宿であった。光圀隠居後、飯村家では光圀公と一層の交友を深めるために詩歌の集いに備え、屋敷内に庵を建てて歓待した。光圀公はその庵が大変気に入り清音楼と名付けた。現在、清音楼跡には光圀公の和歌を刻んだ碑が建っている。その他飯村家では、「光圀公拝領の葵の御紋入りの食器」「光圀公側近からの文書」等を拝見することができた。

・長峰峠道の相生の松（後冥賀）：光圀公や斉昭公が大子巡村のとき、八溝山へと足を運んだ峠道である。この峠の後冥賀よりに斉昭公命名と伝えられる相生の松（戦後伐採）と明治十五年造立の歌碑があった。現在は冥賀灯火の会員によって峠道沿いに移動整備されている。

・熊野神社のささら（浅川）：茨城県指定無形民俗文化財

浅川ささら保存会の接待を受け、小磯さんの話しを聞く。現在ある太郎獅子、次郎獅子、女獅子の獅子頭三体は光圀公寄進といわれる。太鼓を腹に抱え、打ち鳴らしながらお囃子の笛にあわせて踊るのが特徴であるという。

・如信上人終焉の地（上金沢）：堀川住職さんの話を聞く。如信は浄土真宗を開祖した親鸞の孫、東国に下り、奥州大網にて布教活動をしていた。如信は毎年十一月に京都に上り、宗祖親鸞の報恩講をつとめていた。その帰途門弟乗善房のいる上金沢の草庵に入り、翌正安二年正月この地で遷化した。延宝二年光圀公は如信の墓に詣でて、堂宇を建て法隆寺と名付けた。如信座像は光圀公寄進といいわれている。その後光圀公は、法隆寺に宿泊し、詩歌の会を催している。

○第二回九月三十日（土）塩沢・栃原金山コース

大子地方の金山は、佐竹氏の積極的鉱山開発により近世初頭の産出量は飛躍的に増大、全国有数の産出量を実現した。その後幾多の遍歴を経ているが、今回は昭和十年代に盛況を呈した塩沢・栃原金山を実地見聞した。

・塩沢金山：元塩沢地区に住んでいて、現在頃藤に在住の飯田猛さんに道案内を依頼した。塩沢金山は、佐竹時代から採掘。水戸藩の時代には、一時期「塩沢千軒」といわれるほどの賑わいを見せ、盛況を呈していたが衰退。明治中期は休眠状態になった。その後、昭和十二年に北海道硫黄（株）塩沢鉱業所が誕生した。最盛期には従業員等併せて三百四十人を数える大規模な金山へと変身した。電気がつき、銭湯、映画館、病院等が建設され、静かな山村が突如、町に変貌した。その後、国策により昭和十八年頃廃山となった。現在も当時の精錬所跡、鉱山入口、給水タンク等が残されている。

現在は、戦後植林された杉も大きくなり当時の史跡は少なくなっている。

・栃原金山：小規模の金山で、最盛期の昭和十三年～十四年頃は約七十人程度働いていた。県道から約一キロで鉱山口に着く。深山の冷気が漂い独特の雰囲気がある。また、平成になって一時観光鉱山として再開発されたが、現在は廃止となって、観光施設も立ち枯れとなっている。

・大子町指定文化財「道祖神碑」：親鸞聖人が当地を巡錫の砌、道に一夜をあかし後難を避けるため原画を描いて、立ち去ったものを、地元民が建碑したと伝えられている。

○第三回十月十四日 鰹・塩の道コース（大子―猪鼻峠）

昔から東の太平洋岸と西の大子地方や馬頭・野州地方等の内陸を結ぶ道は大子地方の唯一の横の道があった。この道は「東濱魚荷の道」と呼ばれ（『新編常陸国誌』）、太平洋岸の高戸村（高萩）足洗村（北茨城）、川尻村（日立）等から猪鼻峠や月居峠道を越えて大子や馬頭地方に塩や魚等の海産物が運ばれて来る道であった。この道筋の主な遺跡や史跡等を実地見聞した。

・龍泰院（袋田）：光圀公は元禄八年（一六九五）で大子村から徳田宿（旧里美村）へ行く途中、龍泰院に立ち寄り、住職種月師に七言絶句一首を贈っている。その詩碑が一昨年建てられた。

・関鉄之介の歌碑（温泉ホテル袋田浪漫館の入り口）：万延元年（一八六〇）三月三日大老井伊直弼を桜田門外で襲い、首をはねた水戸烈士の実行隊長関鉄之介は、事件後桜岡源次右衛門邸に潜伏していた。そのときに詠んだ歌の碑である。

・月居峠（袋田と小生瀬の境）：小生瀬側から月居古道を行く。月居山の峠に出る。山野辺義智寄進の石仏・石塔、元治甲子の変で焼失し再建された月居山光明寺観音堂、斉昭公の歌碑等を散策後、南嶺にある月居城跡に行く。慶長七年（一六〇二）佐竹氏が秋田へ国替えのとき、月居城主野内肥前守宏忠・大膳亮父子も秋田へ去り、以来廃墟となった。

・地獄沢（高柴）：地福寺の予定を変更し、地獄沢に行く。佐竹氏の国替え時に小生瀬村民が収納の役人達を打ち殺し、水戸藩城代の怒りに触れ一村悉く惨殺されたという悲惨さを残す地である。生瀬乱と呼ばれ、慶長十四年、慶長七年説などがある。供養塔などは建てられなかったのだろうかと、疑問をもつ人もいた。

○第四回十月二十八日（土）霊峰八溝山の史跡コース

今回の講座の最後は、ハイキングを兼ねて霊峰八溝山を歩き実地見聞した。

・八溝山：茨城、栃木、福島の県境に霊峰としてそびえている。別名を日高岳、雲霊山、山王嶽とも言われている。八溝の名の起こりは、深い八つの溝があるからとも言われている。山頂からは安達太良山、那須連山、筑波山、冬の晴天の時は遠く富士山も見渡され絶景であるが、当日はあいにく曇りの天候であった。

・八溝嶺神社：八溝山頂に鎮座し、日本武尊命東征の折創建、白鳳十一年（六〇〇年代）役小角が祠殿造営。延暦十七年（七七九）坂上田村麻呂、悪路王を退治せんと宝剣一振りを奉納、文治元年（一一八五）源頼朝東征の折戦勝を祈願し社領一万石を寄進。さらに佐竹氏の保護、徳川頼房、光圀公の造営などがある。また、毎年五月三日には祭礼が行われている。

・日輪寺：元天台宗、白鳳十一年（六〇〇年代）創設といわれ、大同二年（八〇七）弘法大師中興、日本武尊命などの武運長久が伝えられている。また、板東二十一番札所として有名である。

・八溝山湧水群「金性水」：水戸光圀公が、この地に赴き、五水等を選び、命名されたが、特に金性水は京都の加茂川の水に勝ることを力説されたという。

今回実施した「ふるさと歴史講座現地巡り」には二十四名の参加者があり、数多くの再発見を体験して終了したが、今後も企画の予定があるので、その際は多くの方々の参加を期待したい。

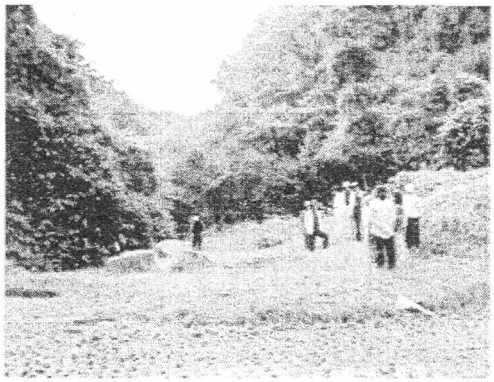
ふるさと歴史講座風景

「月居城跡」碑の前にて

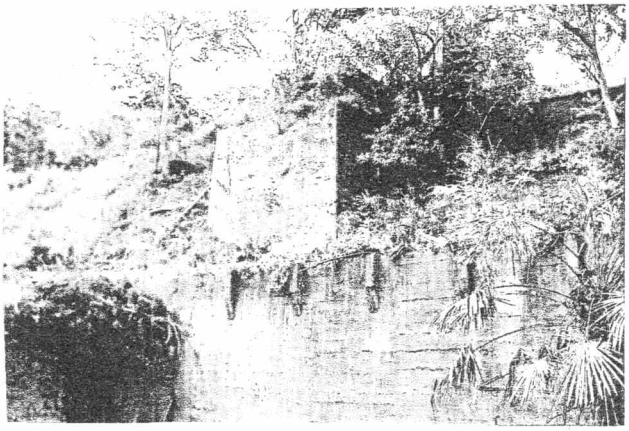
月居城跡での昼食

八溝山頂、「菊地香清の句碑」前にて

光圀の詩碑（袋田・龍泰院）



地獄沢入口（高柴）にて



塩沢金山鉱業所の精錬所跡（大沢）

「ふるさと歴史講座現地巡り」に参加して

村岡祐三

平成十八年度の「ふるさと歴史講座現地巡り」に参加させていただきありがとうございました。

前々年には私の女房が参加しましたが、その時の感想として大子町の歴史を知る上で大変勉強になったことを聞き、今回は夫婦共々参加することに決めた次第です。「ほない歴史通信」の編集人の諸先生方の講義が時に面白く参加者をひきつけて止まず、一言一句聴き逃さずと真剣になりました。

四回の講座のうち私が参加できたのは三回でしたが、何しろ大子町の住人になって二十年目位の私共ですから見るもの聴くもの、全て生まれて初めてのことでした。八溝山、月居山への汗をかきながらの登山、徳川光圀公大子地方巡村の講話等、興味深く体験させていただきました。

振り返ってみますと、大子町との関わりは水郡線から始まりました。最初は水戸駅から上小川駅まできて駅前の那須屋旅館に泊まり、材木製品の仕入れに回りました。石井製材所（石井道蔵社長）さんに寄ったのは、確か昭和三十年代の始まりの頃かと思います。余談ですが、私は当時東京深川の材木問屋に勤めていまして、社長の方針で年に一回、社員一人一人を木材産地に向かわせたのですが、仕入れの修行と言うか修学旅行と思っていました。一本の原木から様々な製材品ができ、製材所の方が少しの無駄も出さずに製品を作り上げる技術に頭が下がりました。石井製材所では工場内を見せていただき、仕入れの契約書を取り交わすことができ、大安心致しました。その後、事務所から石井社長の自宅に招かれ座敷に上がりましたが、日本間の長押上に飛田穂洲翁揮毫の大きな額が掛けられていたのを憶えています。夜になると、近くの久慈川で松明をかざし川面を叩く鮎漁にも招かれました。宿泊した那須屋旅館の風呂が五右衛門風呂で浸るのに一苦労しました。

日を替えて大子駅に降り、吉江製材所に立ち寄りました。商談は纏まりませんでしたが、吉江社長が、今日はどこに泊まるのですかと尋ねられたので「大子駅前に荷物を置いてきました」と言ったところ、折角東京からきたのであれば私が案内しますと菊屋旅館を紹介され、その後も何回も利用させていただきました。また、水郡線沿線を北に向かい、大子駅発で磐城石川を経て竹貫の佐川製材さん、古殿の岡部製材さん等を巡って大子まで戻りました。棚倉の手前の吉成製材さんでは社長の自宅に招かれ、囲炉裏の火の下に水で濡らした紙に松茸を包んでほのかに焼き上がった絶品を酒と共にご馳走になり、山の幸を堪能させていただき、ただただ感謝でした。

その後、二回三回の集荷後、昭和三十四年九月二十六日から二十七日の伊勢湾台風の時が最も大変でした。何しろ木場の材木問屋の各店では、名古屋方面からきた業者により買い占められ払底してきたのです。直ぐに社長命令で胴巻きに現金を詰め込んで大子町に直行、那須屋旅館、菊屋旅館を拠点として新規仕入先を求めて動き回りました。一万円札が出てない頃でしたから、腹の周りが膨れ汗をかくと札が湿ってきました。現金買い付けは後にも先にもこの時だけで、契約達成に必死でした。その何十年か後、まさかこの地に住みつくとは夢にも思わなかった頃の水郡線沿線製材所駆け巡り記です。

それにもまして、林業、木材製品の衰退が気懸かりな今日この頃です。この講座に参加して昔を思い出すと共に、大子町の再発見につながりました。「ふるさと歴史講座現地巡り」でお世話になった先生方の益々のご健勝をご祈念申し上げて、お粗末ながら筆を擱きます。

ふるさと歴史講座・月居山にて

斎藤　洋子

子育ても一段落して何をしようかと考えていた時の講座募集なので、迷わず参加しました。体力はなく皆さんに付いていけるか心配でしたが、四回とも無事参加することが出来ました。兼業農家なので、一人で稲刈脱穀をしてくれた主人に感謝です。大子の土地にも人にも歴史があります。大子に住んでいながら一人ではこられない所、しかも、先生方の説明を拝聴しながらなので大変良かったと思います。

光圀が詠んだとされる竜泰院の詩碑「遠くに月居山を眺めて……」詩のある生活、余裕のある生活をこれからおくりたいと思っています。昔もこの道をめぐったであろう生瀬からの登山道から月居山に向かいました。月居山頂の頬を撫でる風に何ともいえない爽快感がありました。また、小澤先生の健脚には大変驚きました。そして、天狗党・諸生党の壮絶なる戦いを見ていただろう木々が風に吹かれていました。

新聞によると、天狗、諸生の争いの源流は、大日本史編纂を巡る師（立原翠軒）弟子（藤田幽谷）の対立にあると言われています。やがて、世継問題や藩政改革を巡る対立に発展し、天狗党の筑波山挙兵を機に燃え上がったようです。私の祖先は諸生党だったということですが、何も記録は残っておりません。母の実家は天狗党で、敦賀で処刑されたのを偲んで、松原神社の五年に一度の祭礼には一族でお参りに行きます。一族に類が及ばない様に偽名を使い、ニシン小屋で鎖につながれ処刑された人、時代の先端をいった人々に手を合せます。藩内抗争などのせいか、茨城県には、なぜか偉人が少ないのが分かるような気がします。遠くて近い昔に思いをはせて胸が熱くなりました。また、このような講座がありましたら、是非参加したいと思います。

第二回ふるさと歴史講座現地巡りに参加して

吉成　惠子

私は、歴史講座現地巡りと聞いた途端興味が湧きました。山歩きを味わいながら、住んでいる町の歴史が勉強できるということと、最近俳句づくりを始めたので、その材料が拾えればいいなと思い、また、大子町の歴史から、私達の今後の行く末を見つめるきっかけにもなればいいなと思って参加しました。

栄枯盛衰いつの世も人の一生も、栄えてそれでも後世に残してゆく。そんな変遷を実感できる期待を持って、昨年の九月三十日塩沢・栃原金山巡りに参加したわけですが、案内の先生方の説明に佐竹氏の積極的な鉱山開発による全国有数の産金量の水戸藩の台所事情は塩沢金山によって相当賄われていたらしく。一時期「塩沢千軒」と言われる程の賑わい盛況で昭和十年前後には、従業員数三百四十人がいて、金山町をつくっていたそうですが、現在は廃山となっています。この山地がそのようなところだったのかと、驚きの連続で聞き入っておりました。日立鉱山や各地の炭鉱も同じような盛衰を歩んだと思うと、国が富み町が潤い、人が豊かに暮らすためには、どんな所であっても、その努力によって一時代を形成できるものだと実感しました。

時には人を惑わす金の鉱脈が、私達の大子町にあり、多くの人々の生活を支えてきた部分があったことに、改めてこの町を掘り起こし、その良さを追求し、現代に活かせるノウハウを見につけることの重要性を実感しました。

心に残る楽しい歴史探訪となりました。また、新たな探訪がありましたら、是非参加しようと思っております。

「土木通（つちあけび）　歴史の山に　赤あかと」

【昭和の始め頃の農家　三】　楮（二）楮の表皮とり

楮蒸かしが終わると、むいた皮は適当な大きさに束ねておく。冬になって外の仕事が出来なくなると、楮の皮の表皮（黒い部分）を削り取る「表皮とり」という仕事をする。楮の皮を二，三日水につけて柔らかくしておく。

冬だからその水が凍り楮の皮は冷たい。指先が凍える程の仕事になる。だから天気のよい日には日当たりの良い縁側などで、夜は土間に火を焚いて、その周りに台を造ってその上で仕事をする。藁で作った表皮台の上に楮の皮を載せ、広げながら小さな包丁のような小刀で黒い表皮を削り取る。

一枚一枚丹念にやるので根気の要る仕事だ。表皮は薄いのであまり力を入れると白い部分まで削ってしまう。注意しながら丁寧に削る難しい仕事だから主に女の人がやっていた。

世間話などをしながら楽しそうだが、ちょっと前かがみになってやるので疲れる。これを毎日の様に続けるのだからたいへんだったと思う。

表皮とりが済んだ白い皮は小さな束にして庭先や畑に干場を作って乾燥させる。干場は縄を張りそこに掛けておく。楮は天気が悪い時以外は、こんにゃくの様に毎日取り込む事はしなくとも良い、冬の乾燥期だから四，五日から一週間くらいでほぼ乾燥する。雨に濡らすと色が悪くなるので、天候に注意して白く乾燥する様に気を配る。

こうして乾燥した楮の皮は仲買人に売り、この地方の農家のたいせつな収入源になる。

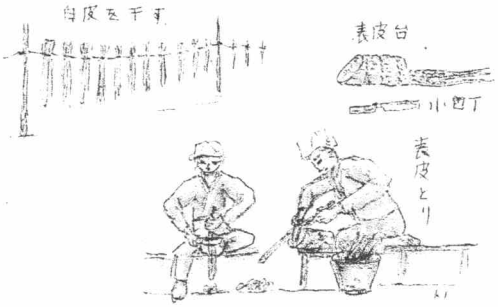
このほか、皮をむいた残りの木の部分（楮からと言った）は束ねて積み重ねて保管して置く。燃えやすいので冬の貴重な燃料になった。特にへっついやいろりでご飯を炊いたり料理をしたりする時には、早業が効いて便利だった。

その頃は電気炊飯器やガス釜はもち論、ガスコンロやレンジなども無く、調理はすべていろりやかまどで木を燃やすか、炭火で行うのが多かったから、よく燃えて扱いやすい楮からはよい燃料だった。

このように、楮は同じ株から毎年収穫でき、皮も木の部分も利用できる無駄のない有用な植物である。乾燥した皮は和紙の原料として有名で、丈夫で品質もよく紙幣にも使われたり、障子紙、水墨画や習字その他の用紙として利用された。

しかし、今は大子地方の楮は昔に比べれば、かなり少ないと言うより殆ど無くなったと言っていい。戦時中や戦後の食料増産のために掘り抜いてしまったり、戦後は西洋紙が主流となり和紙は用途が限られる様になってきた。そのため和紙の生産は少なくなり、楮はあまり必要が無くなってきたのである。止むを得ないが惜しまれることである。

（石井）

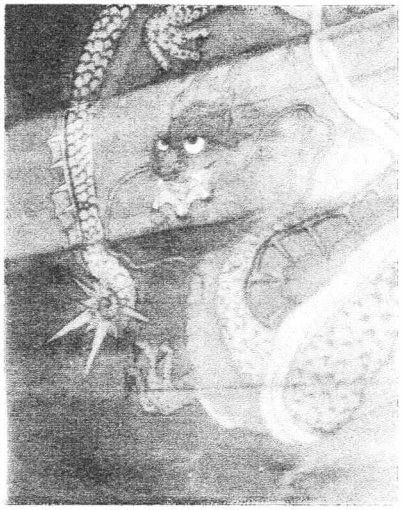


青龍山観音院天井の龍の画

大子町金町の街はずれの道路（大子那須線）の左側に、通称「観音堂」と呼ばれている堂宇がある。正しくは「青龍山観音院」という。堂宇の入り口には、芭蕉の句碑「河上とこの川下や月の友」が建っている。

この観音堂は、慶長年間（一五九六～一六一五）益子志摩守が豪族として栄えていたころ、志摩守の屋敷が現在の保育所あたりにあったが「屋敷のある位置から見て観音堂のある方角が裏鬼門に当たるというので、災難除けのために建てられたと伝えられている。縁日は毎年七月九日、この日益子家では観音堂を開き、先祖を供養するのを恒例としている（益子家末裔談）。

かつてこの観音堂の天井には、狩野元信による龍の画が描かれてあったという。その龍は夜ごとに堂宇の下を流れる久慈川の桜淵に姿を現し、水飲みをしながら人間のくらしを見つめていたという伝説がある。龍の画はいつの間にか行方不明になり、現在ある天井の龍の画は、作者不詳である。



龍は二本の角と四本の足をもち、頭部の髪の毛は八方に広がり、大きく開いた赤い口、二本の牙をむき出しにし、両眼が凛々と輝き、災難除けを象徴している。（注：観音堂は、永源寺が谷津の小山にあったころ移されたという説がある。）（小澤）

今回の「ほない歴史通信四二号」では、昨年九月、十月に開催した「ふるさと歴史講座　現地巡り」の報告書と参加者からの感想を掲載しました。講座開催に当り、天気を一番心配しましたが、四回とも天候に恵まれて充実した講座を開催することができました。八溝山では講師が一般の人にも八溝の歴史を説明して感謝され、塩沢金山コースでは講座以外の人も訪れていて、歴史・金山に対する関心の高さに驚きました。

また、過日は、茨城県の城跡等を研究、調査しているので大子町の城跡、要害、館跡の位置がどこにあるか教えて欲しい依頼が来ました。茨城県には、現在城跡等は約千三百を数え、全部調査のうえ一冊の本に出来ればと考えているそうですが、歴史に対して興味があり研究・調査している方も多く、当歴史資料室では、少しでもこうした方々に対応できるよう研鑽に努め。そして、研究の一端を「ほない歴史通信」で発表して行きますのでこれからもよろしくお願いします。

（鈴木　徹）

編集人　斎藤　典生（茨城大学人文学部）
　　野内　正美（茨城県立大子清流高校）
　　石井喜志夫（元　教　員）
　　小澤　圀彦（元　教　員）
　　鈴木　徹（大子町生涯学習課）
編集発行　遊　史　の　会
大子町立中央公民館歴史資料室気付
久慈郡大子町大字池田二六六九番地
〒319-3551　☎0295（72）2627